「毎日森」横浜トリエンナーレ2005 アートサーカス- 2005/山下ふ頭3号上屋・横浜

"Forest of every day" Yokohama Triennale2005 -Art circus- ,Yokohama

鑑賞者は靴を脱いで作品内に入る。宙に飾られたぬいぐるみは、古着を使って作家とボランティアが毎日展示場所で製作したもの。気に入ったぬいぐるみを、一人につき一体1000円で購入することもできる。製作室の壁は黒板になっていて、チョークを使っての落書きも可能。周りに設置した円卓には日記帳・ペン等が置いてあり、鑑賞者が書きたいことを自由に描くことが出来る。

「絵画の洪水」まいにち！アート　2009／群馬県立近代美術館・群馬

"Flood of painting" Everyday!Art!

美術館のコレクションの中から壁面に展示する絵画を選出。展示室の床を見立ててブルーのカーペットを敷き、その上に実物大のオブジェ（クッションのようなもの）を設置する。
オブジェは水面に見立てた場所に映る影を古着により実体化したもの。来場者は靴を脱いでオブジェに寝転んだりしながらくつろいで実際の絵画を鑑賞することができる。
一つ一つのオブジェには、例えばある静物画の場合、皿の上に置かれた魚をはがすとその上に骨の魚が縫い付けてある…などの様々な仕掛けが用意されている、また、絵画に登場するキャラクター（宇宙人）はかぶりものに仕立ててあり、来場者は自由にかぶることができる。
絵画の影を実体化し、手に触れられる形で設置することで観客の好奇心を促す。そのことで好きか嫌いかなどの一方向からの判断ぬい多角的な視点を加えてもらうことができ、新たな発見が生まれるのではないかと試みたインスタレーション。通常の美術展では、分断されているような印象のある常設コレクション展と企画展に関わりを持たせる意味合いを持つ。

絵画の洪水ドローイング

靉 嘔　Ay-O（1931～　）
ミスター＆ミセス・レインボー　Mr.and Mrs. Rainbow
1974年　油彩・キャンバス　71.0×50.8

宇宙人が帽子と着飾りになっており、来場者がかぶれるようになっている。

部分

舌がのびるようになっている

鶴岡 政男　Tsuruoka Masao（1907～1979）
雨の夜　Raining Night
1959年　油彩・キャンバス　261.3×162.4

3ピースのパズルになっており、自由に動かすことができる。

豊田 一男　Toyota Kazuo（1909～1989）
重たい帽子　Heavy Hat
1965年　油彩(ロー画)・カンヴァス　130.3×193.9

部分

静物の魚をはずすと骨の魚が出てくる。

南条 一夫　Nanjyo Kazuo（1900～1986）
鯛の静物　Stil Life with Sea Bream
1927年　油彩・カンヴァス　72.8×91.0

部分

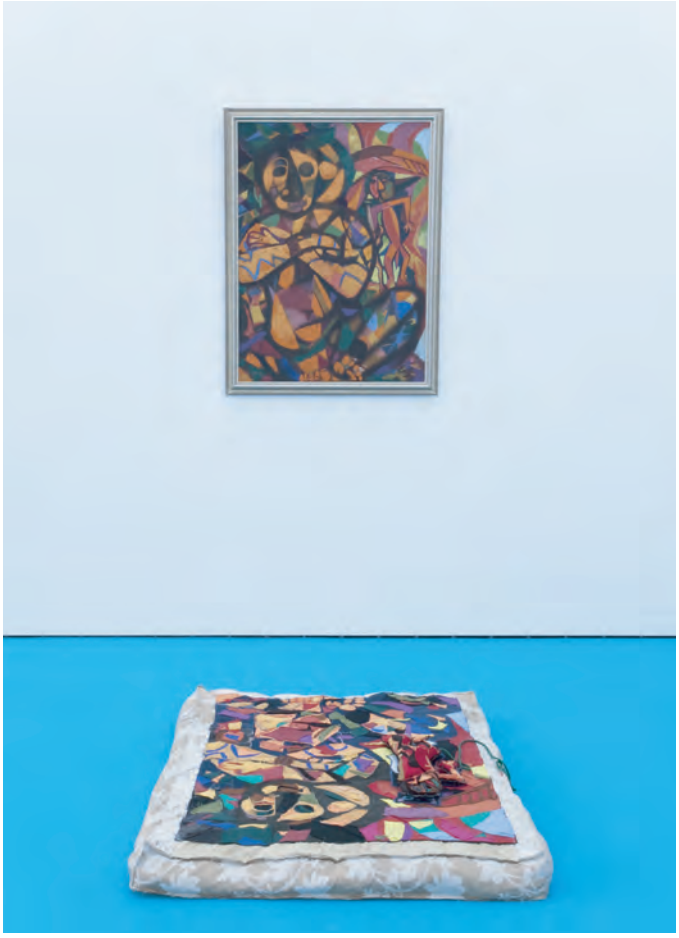
ドアが開いてヤモリが出てくる。

南条 一夫　Nanjo Kazuo（1900〜1986）
仔山羊のくる部屋　Room with Little Goat Approaching
1969年　油彩・キャンバス　91.0×65.5

部分

スイカが立体になっていて持つことが出来る。

福沢 一郎　Fukuzawa Ichiro（1898〜1992）
水瓜を持つ男　Man with a Watermelon
1955年　油彩・キャンバス　130.3×97.0



部分

小人がとれて猫が現れる。

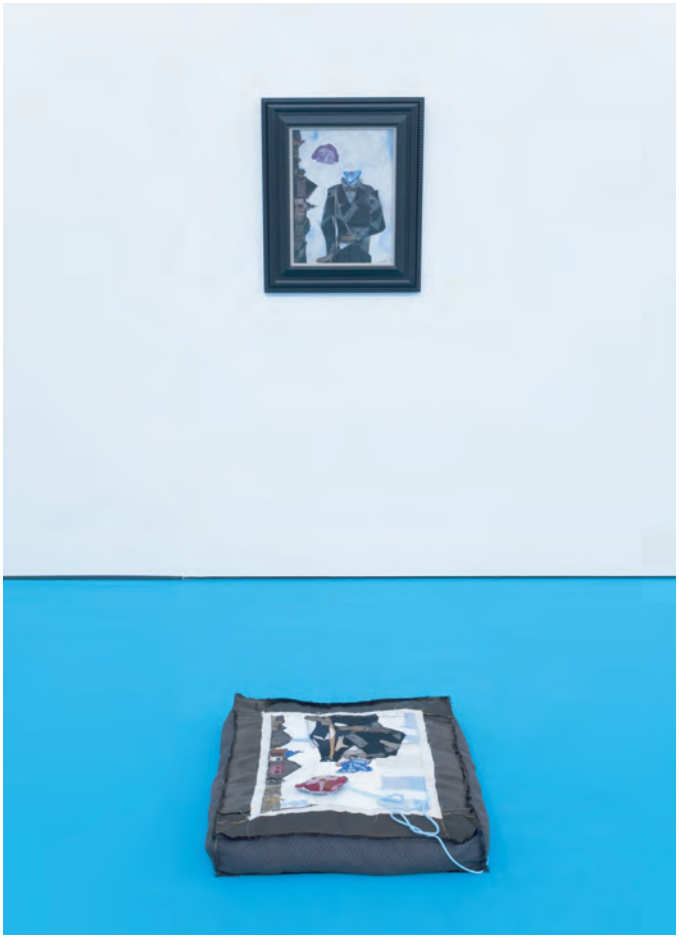
福沢 一郎　Fukuoka Ichiro（1898～1992）
森の人間達　People in the Forest
1955年　油彩・カンヴァス　130.3×97.0

部分

女性像がはずせて"川隈路之助"の"パンジー"が出てくる。

山口 薫　Yamaguchi Kaoru（1907〜1968）
緑衣の女　Woman Dressed in Green
1931年　油彩・カンヴァス　92.0×72.7

川隈 路之助　Kawasumi Michinosuke（1906〜1993）
パンジー　Pansies
油彩・カンヴァス　53.0×45.0



部分

頭が取れて、マジックテープでどこでも付けられるようになっている。

マルク・シャガール　Marc Chagall（1887〜1985）
世界の外のどこへでも　N'import oui hors du monde
1915年　油彩・カンヴァスに裏打ちされたカルトン　61.0×47.3

部分

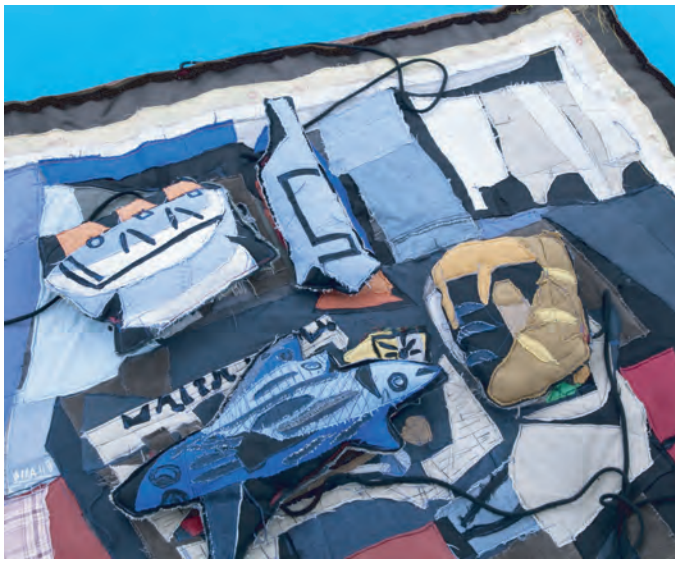
ふたりの女性像がはずせて黒い猫が現れる。

ラウル・デュフィ　Raoul Dufy（1877〜1953）
ポール・ヴィヤール博士の家族　La famille du Paul Viard
1927年〜33年頃　油彩・カンヴァス　114.5×110.0

部分

人形が立体になっていて自由に持つことが出来る。

レオナール・フジタ(藤田嗣治)　Leonard Foujita (Fujita Tsuguharu)（1898～1992）
人形を抱く少女　Jeune fille a la poupee
1923年　油彩・カンヴァス　73.4×54.3



部分

魚や皿などのモチーフがはずせて、すべて楽器になっている。

パブロ・ピカソ　Pablo Picasso（1881～1973）
魚・瓶・コンポート皿（小さなキッチン）　Fishes,Bottle and Comport
1922年　油彩・キャンバス　81.0×99.5

部分

花が立体になっていて、花びらをめくると虫が出てくる。

ホセ・マリア・シシリア　Jose Maria Sicilia（1954〜）
赤い花々　Red Flower
1998年　油彩・ろうそく・蜜ろう・板　184.5×157.0

モーリス・ルイス　Morris Louis（1912〜1962）
ダレット・サフ　Dalet Saf
1958年〜59年　アクリル・カンヴァス　233.0×344.0

色の部分がカーテン状になっていてめくると３原色の魚が見えてくる。

「太郎の泉」　岡本太郎《明日の神話》原画特別展示／2010／広島市現代美術館·広島

"Fountain of Taro" Taro Okamoto , Myth of Tomorrow

広島市現代美術館に特別展示される岡本太郎製作の《明日の神話 1号原画（1967年制作/縦48cm×横195cm、油彩）を元に、古着を素材に【縦 約150cm×横 約500cm】の巨大なクッションのオブジェを製作し、原画の前の床に鏡合わせの状態で設置。絵画（美術）に触れ、湧き出る人間の想像力の泉に写し出されたイメージを視覚化した。

《明日の神話》のがい骨や、他のモチーフ部分をめくると、ゴーギャンの《我々はどこから来たのか 我々は何者か 我々はどこへ行くのか（1897年制作/139cm×374.5cm/油彩）》の人物モチーフが現れる。繰り返される生や死、人類の悲劇と喜びといった繰り返される不変のテーマを重ね、今生きている閲覧者が原画と見比べたり、寝転びながら自ら作品に重ね合わすことで、自然と視覚を意識することを促すインスタレーション。太郎の赤い目玉のモチーフに重ねた並行に飛ぶ白い鳩は、高低さの見えない状況の中で生きる人々の希望の行方を示している。

インスタレーション風景

ドローイング

部分

部分

部分

岡本 太郎　Taro Okamoto（1911～1996）
明日の神話　Myth of Tomorrow
1967年　油彩　48.0cm×195cm

《明日の神話》のがい骨や他のモチーフ部分をめくると、
ゴーギャンの《我々はどこから来たのか 我々は何者か 我々はどこへ行くのか》の人物モチーフが現れる。

ポール･ゴーギャン　Paul Gauguin（1848～1903）
我々はどこから来たのか 我々は何者か 我々はどこへ行くのか　Where Do We Come From? What Are We? Where Are We Going?
1897年　油彩　139cm×374.5cm

「ふたご森」　夏のワークショッププロジェクト2010「ふしぎの森の美術館」／広島市現代美術館·広島

Twin forest , Summer Workshop Project 2010／Hiroshima City Museum of Contemporary Art

森をテーマにしたワークショップ形式のグループ展に参加。大量の古着で覆った壁の前の床に緑色のカーペットを敷き、古着を縦に長く繋ぎ樹木に見立てたインスタレーションの中で、展覧会期間中、毎日先着10名の参加者が描いた森の動物をイメージしたドローイングを元に、古着を素材としたヌイグルミのオブジェを作る公開製作を行った。

通常、描いたドローイングと出来上がったオブジェは、その日に参加者が持ち帰るのだが、「ふたご森」では古着の森に双子児のように展示し、日々増えていく作品を参加者だけでなく、他の閲覧者も展示を楽しめるようにした。

参加者やその家族・関係者が何回も会場に訪れることで、展覧会そのものに厚みを与えることを目的とした。全56日間で523個のオブジェを製作した。

展覧会後、ドローイングとオブジェは参加者に返却された。

インスタレーション

参加者ドローイング

ドローイングオブジェ（古着・ハギレ・綿その他）

日付 8/19 番号 12
お名前 坊野 琴
日付 8/12 番号 2
お名前 まえだ いそら
MOCA
8/13 番号 No.9
お名前 岩本 乃久
MOCA

「光 道」（こうどう）

Light road

ゴットンアートマジック／2012/田川市記念会館·福岡

明治末期から戦後の炭坑に生きる人々の生活を描き、2011年にユニセフ世界記憶遺産に登録された画家・山本作兵衛の原画展に合わせて、筑豊の街で開催されたアートイベントに参加。
作兵衛へのオマージュとして、原画を元にした大きなタペストリーは古着を素材にパッチワークの手法で制作した。タペストリーは、作兵衛展の展示室につながるエスカレーターの上部に暖簾として設置。
暖簾の表は、作兵衛の作品「母子入抗」を、裏は九州鉄道筑豊線と母子入抗のモチーフを現代の人々が生活する街の夜景に組み合わせて配置している。汽車の煙突から出る煙はゴットン節の歌詞に形を変え、夜空に漂う「母子入抗」の暖簾をくぐり、原画展を鑑賞して過去の炭坑の生活を体感した観覧者が、新たな意識を得て企画展により街のあちこちに点在している作品と出会うこととなる。
本作品は観覧者が過去から現在、そして未来へと自然と行き来するためのアートゲートとしての役割を持つ。

インスタレーション風景

明治
汽笛三声
午前三時
入坑時報
〜七つからカンテラ提げて
坑内がも親の罰ゴットン
1977 作井秀

表面

〜七つからカンテラ提げて
坑内さるがも
親の罰ゴットン
明治三十年九州鉄道
筑豊炭車五分前
鳴ったリン
リン
〜光道(コウドウ)
2012
泰輔

裏面

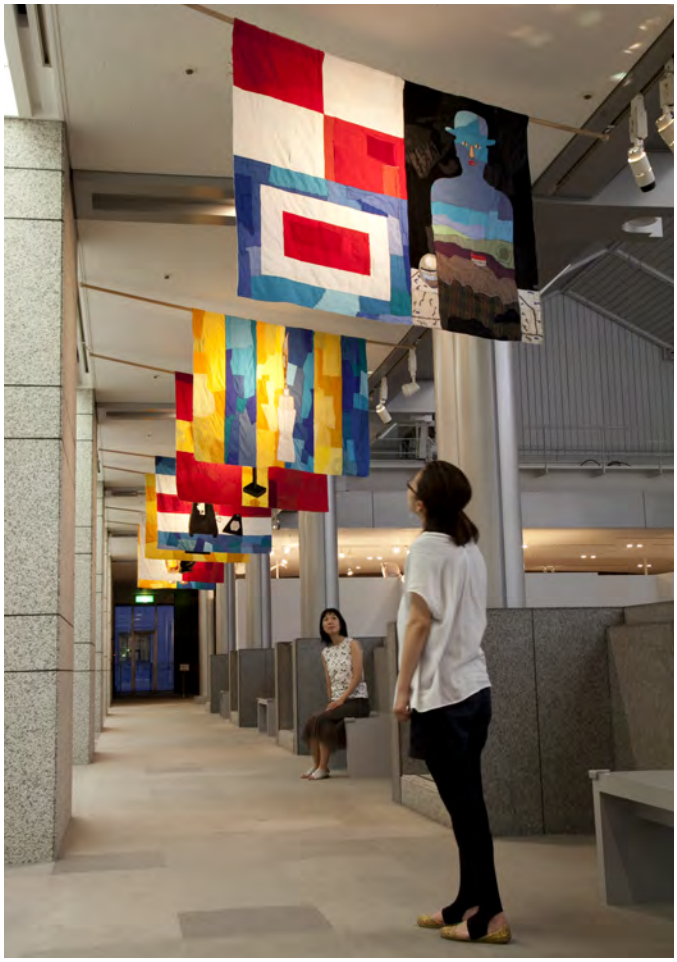
「どこから来てどこに行くのか」

ヨコハマトリエンナーレ2011／横浜美術館·横浜

Where did it come from and where did it go?　YOKOHAMA TRIENNALE 2011/Yokohama Museum of Art

　3年に一度、横浜で行われている国際展でのインスタレーション。全国から集めた古着を素材として７つの大きな旗を制作、会場内の吹き抜けに面した2階の通路上に設置した。
カラフルな旗は、船舶同士が海上で交信する際に用いる文字旗を引用したもの。文字旗には、「ご安航を祈る」「私はあなたと受信したい」といった意味が含まれている。7枚の旗のうち、6枚には今回トリエンナーレに出品されている横浜美術館のコレクションをモチーフとして使用。他の1枚は、東日本大震災後、初めて行われる国際展であることを念頭に置き、福島県立博物館所蔵の埴輪（力士）をかたどったものを配置した。
会場の旗は、取り外すことが可能で、会期中2回地元小学生によるマーチングバンドのパレードが行われた。普段美術館の外に展示されることのないコレクション作品を旗にして、公演という別のパブリックな場所に移動、明快な答えも問いかけももたない信号を送ることで、内と外との空気を循環させることを意識した。

マーチング·バンドによるアート·パレード
（中央の作品はイン·シウジェン）



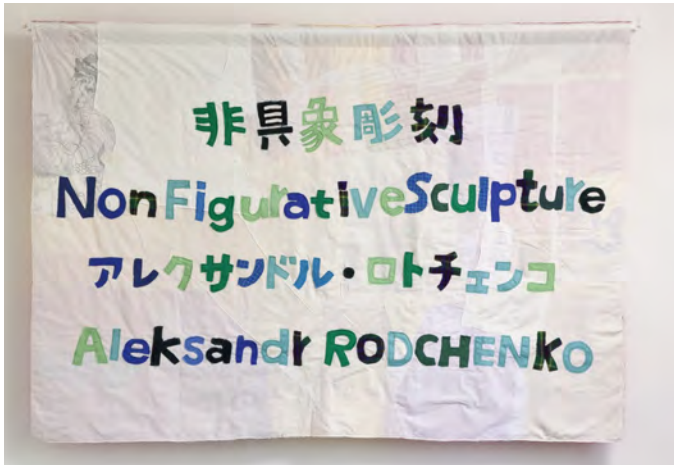
埴輪 相撲をとる人
Haniwa of Sumo Wrestler
福島
FUKUSHIMA
Eichhornchen
メレット・オッペンハイム
Meret OPPENHEIM
真夜中の太陽
Sun at Midnight
イサム・ノグチ
Isamu NOGUCHI

王様の美術館
Le Musée du Roi
ルネ・マグリット
René MAGRITTE

01

空間の鳥
Bird in Space
コンスタンティン・ブランクーシ
Constantin BRANCUSI

02


非具象彫刻
Non Figurative Sculpture
アレクサンドル・ロトチェンコ
Aleksandr RODCHENKO

03

不滅のオブジェ
Object Indestructible
マン・レイ
Man RAY

04

05

06

07

01.　どこから来てどこへ行くのか　ルネ·マグリット《王様の美術館》、横浜美術館
02.　どこから来てどこへ行くのか　コンスタンティン·ブランクーシ《空間の鳥》、横浜美術館
03.　どこから来てどこへ行くのか　アレクサンドル·ロトチェンコ《非具象彫刻》、横浜美術館
04.　どこから来てどこへ行くのか　マン·レイ《不滅のオブジェ》、横浜美術館
05.　どこから来てどこへ行くのか　イサム·ノグチ《真夜中の太陽》、横浜美術館
06.　どこから来てどこへ行くのか　メレット·オッペンヒム《栗鼠》、横浜美術館
07.　どこから来てどこへ行くのか　《埴輪　相撲を取る人》原山古墳、福島

古着·ハギレ·糸　／120.0 × 171.0cm

りゅうどう
「龍道」

Dragon of the road

大隈アートマジック〜母里太兵衛のオモイヤリ〜／2014／旧大隈小学校･福岡県嘉麻市

嘉麻市にゆかりの深い母里太兵衛に由来する福岡市博物館所蔵の大槍「日本号」と龍の紋様。
遠賀川の恵みによりもたらされる稲穂などをモチーフに古着や和服のハギレなどを素材にパッチワークの手法により長い反物のようなタペストリーを制作。遠賀川の川沿いに祀られている須賀神社の天井に設置した。
イベントに訪れた人々は街並みを散策しながら展示場所に辿り着き、作品を体験することで川にある龍に導かれる!!

インスタレーション風景